

信用金庫の融資量と地域経済力との計量分析

——地域経済力との定量分析——

立命館大学大学院 吉原清嗣

昨今の地域金融機関の経営を示す指標は、経営の収益性と安全性を示す指標を採り上げている。しかし、近年の地域金融機関経営は、経営の良否を論じる場合、地域貢献性との両立を図る必要がある。収益性と安全性に併せて、地域貢献性の両側面を考慮に入れるべきである。しかし、この地域貢献性が指標化しにくく、社会的背景や景気循環の過程で変化する厄介者である。

地域への寄付、納税等、地域行事への参加、文化行事への後援、なども当然、地域へのコミットの仕方である。しかし、最大の貢献の一つは地域経済の浮揚へのイニシアティブであると考えられる。資金の必要者より応需された融資金は、預金者、会員等から預かる預金を原資として、経済の潤滑油としてテリトリー内に供給される。そこから地域経済の毛細血管を通して辿り着くのが、地域住民の所得であると考えられる。これが、様々な規制の下で営業する地域金融機関の根幹業務であると推察できる。

地域金融機関の最大の責務である地域経済への資金提供（融資業務）がはたして地域経済に与える影響はあるのか、の問いに対する研究において、サンプルとなりえるのは信用金庫であると考えられる。理由は、預金については制限なく受入可能であるが、融資は地区の定めがあるからである。しかし、相互扶助・非営利、の概念や税制優遇が存在する事も考慮しなければならない。

2008年度の世界的金融危機より業界の中央機関を含め、多くの信用金庫が赤字決算を迫られるなど、取巻く環境の変化は著しい。たとえ、現在の金庫業績が納得の行くものであっても、多様化する環境下では、すでに現在の業績を生み出している競争力は低下し始めている事も考えられる。その論議の中の根底には、絶えず「果たして信用金庫は地元経済に奉仕して、地域経済の担い手であるのか」、という問いかけが含まれている。これに対して、定性的事例で応えるのも一つであるが、地域経済と信用金庫経営との関係を定量的に捉えることも、議論を正確に行う上で重要である。本稿はここについて踏み込むものであり、確かめられる最大の収穫である。要するに、2008年3月期の信用金庫と地域経済の関係を探り上げ、その分析を通じて、上記に言われる文言の経済的仮説を検証するものである。

結果は、貸出残高のパラメータは376.9129とプラスで有意（T値2.70 P値0.007）（1%有意水準）であった。自由度修正済み決定係数は、0.1386と当てはまりは良くなかったが、地域の経済力に対し信用金庫の貸出残高は、変動（符号は正）を説明するのに有効であることが統計上、支持されたと言える。概ね地域経済に影響を与えると言われる信用金庫であるが、計量的に影響を及ぼしている結果が導き出された。残された課題は、信用金庫と地域経済との相関関係を測る尺度が数値化され、評価できるようになっておらず、さらに評価指標を明確にする事である。

信用金庫の地域経済に対するコミットメントの基本的あり方を計量的に明らかにする事が、信用金庫の今後の目指すべき有様提言の基礎となると考える。そして、調査結果が地域金融機関の存在価値であり、営業活動の根本であると考えられる。